

台北の世界家庭医会議に参加して

時論

はじめに

日本プライマリ・ケア学会は、世界家庭医学会(WONCA)の一員として様々な活動を行ってき

一九九九年三月六〜十日に、台湾の首都である台北で、アジア太平洋地域WONCA国際会議が開催された。

台湾の医療の概要

台湾の人口は二二〇〇万人。台湾の医学・医療制度は、米国に類似した点が多く、英語の教科書で医学教育が行われている。

医学校は八つあり、従来、卒業生は毎年一二〇〇人であったが、来年一三〇〇人になる。国家試験

板東浩

は二つに分かれ、Part 1は四年終了時、Part 2は卒業後に一年間のインターンを終えた時点に行われる。台湾には兵役制度があるが、インターンを終えた後に行くことが多い。

医師は、家庭医と「generalist」と専門医であるspecialistに分けられる。大学病院や公立の病院に加えて、多くの開業医が活躍している。

英国のように、患者がまず診てもらう家庭医が定められているわけではなく、自由に診察を受けられる。ただし、診療の費用や保険点数は、家庭医と専門医との間で差異があるという。興味深いことは、家庭医が一日に診療する患者の数によって、若干保険点数が異なってくることだ。患者数が少なすぎると診療報酬は低く、ある範囲内では高く、多すぎると再び低

くなるという。われわれ日本人医師の立場から、台湾の生活、経済、医療などを外観すると、他の東南アジア諸国とは異なっており、むしろ日本や米国に近いような印象である。

WONCA国際会議

このたびのアジア太平洋地域WONCA国際会議は、台北の中心にある国際会議場で開催された。台湾のほとんどの医学会からの後援を受けた大規模なものだ。今回のスローガンは「Health for all by year 2000」で、テーマは「family medicine: meeting old challenges」であった。

開会式では、世界WONCA会長のHiggins氏および副会長でアジア太平洋地域担当のLeopardo氏が、本WONCA会議の開催は喜ばしいと挨拶した。引き続き、台湾衛生省の代表が台湾の医療保健行政について触れ、台湾はnew challengeの医療を目指しており、その中で、家庭医が果たす役割は重要であると述べた。

また、台湾家庭医学学会理事長のChing-Yu Chen氏およびorganizing committeeのMing-

Chih Chou氏が、多くの参加者を受け入れることができ大変嬉しく、充実した会議を祈念すると述べた。

参加者数は、事前登録者だけで台湾から三〇〇人、中国から一〇六人、日本から四四人であったが、実際には台湾から約七〇〇人が参加し、一二〇〇人規模の集会となった。

本会議では、理事会や各種の委員会に加えて、歓迎パーティー、カルチャーナイト、フェアウェルパーティーなど、趣向を凝らした企画があり、やや贅沢と感ぜられるほどの熱烈な歓迎を受けた。

学会の発表

開会式に引き続いて、Lynn P. Carmichael氏がThe once and future generalistについて基調講演を行った。本講演は、本国際会議のフォーカスであり、家庭医の歴史、役割、将来像についても触れた。

プログラムは、基調講演、教育講演、ワークショップ、シンポジウムなど多彩で、自由な雰囲気での議論できるポスター発表が一〇七題もあり、活発な議論が続いた。

太平洋地域WONCA会議の理事に津田 司教授が出席した。

理事会では現在、①国際会議への参加費を低くできるように検討、②日本での開催は二〇〇五年六月頃を予定、③従来、欧州地域で作成されていた会則(内規)を当地域でも作成、④当地域で新しい家庭医学の雑誌の発刊などが議論されている。

おわりに

今回の会議は台湾の医学界すべてが尽力して下さり、organizing committeeの先生方には心より感謝申し上げたい。アジア太平洋地域WONCA国際会議は、二〇〇二年には中国、二〇〇五年には日本での開催が予定されている。今後、日本プライマリ・ケア学会がアジア太平洋地域で果たす役割も考えていきたい。

本論文は、日本プライマリ・ケア学会から、小林之誠、川久保亮、青山英康、小松 真、山田隆司、葛西龍樹、津田 司、前沢政次、伴信太郎、加藤恒夫諸氏のご校閲を得ました。

(日本プライマリ・ケア学会国際交流委員会委員長 徳島大第一内科)

時論

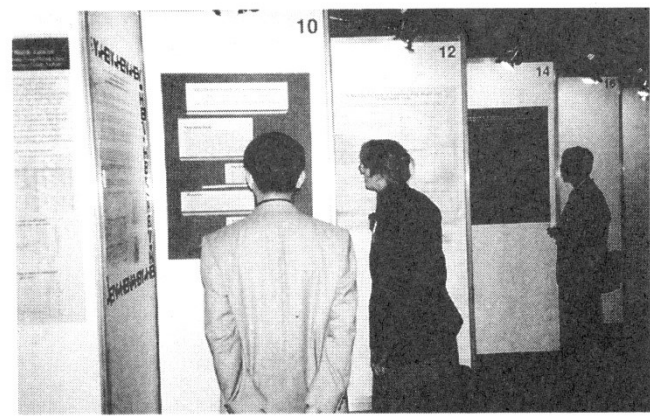
日本からは、津田 司氏(川崎医大教授)が「地域に根ざしたプライマリケア教育」、前沢政次氏(北大教授)が「変遷する社会における家庭医療・地域医療の役割」、葛西龍樹氏(日鋼記念病院・北海道家庭医療学センター所長)が「癒す者と癒される者」医療人間学教育への展望、松岡宏明氏が「在宅における終末期医療」、Eng Lock Khoo氏が「日米の医療・研修の差異」、筆者が「地域における糖尿病の現状と予防」を口演発表した。

糖尿病のシンポジウムでは、各

国から様々な質問を受けた。近年日本と同様に、アジア太平洋地域の国々においても、糖尿病などの生活習慣病が増加しつつある。本邦での経験や対策を、近隣の国々は参考としたいようだ。同じアジア人種であるが、食事や生活習慣は異なっている。議論のターゲットは、次のようなものであった。①病態について・人種によるインスリン抵抗性の差異、②食事について・複合炭水化物の米、代謝に影響を及ぼす香辛料、欧米や中国で摂られている脂肪の質と量の差異、③運動について・肥満の率や



開会式で挨拶をするHiggins WONCA会長



ポスターセッションのひとつ

座長は、日本プライマリ・ケア学会副会長の青山英康氏(岡山大学教授)、津田 司氏、前国際交流委員長の前沢政次氏、国際交流委員会の山田隆司氏、葛西龍樹氏、加藤恒夫氏が務めた。国際会議の全体の印象として、台湾はアジアにありながら、医学教育や医療制度が米国を参考にしており、家庭医学のコンセプトは欧米に近いものが感ぜられた。

アジア太平洋州の今後

一七カ国が加盟しているアジア